

「引揚げ体験記」

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の「玉音放送」を聞く。この日が終戦を迎え戦後の始まりだった。

ここは中国の太原市。両親が呉服店を営んでいた。当時私はハオ、国民小学校二年生だった。一人っ子だったが店には住み込みで働く中国人も何人かいて家族のようににぎやかで何不自由ない暮らしだった。が、この日を境に生活は一変した。これまでに築き上げた資産等全てを没収され、早くも半年後には、日本への引揚げが決まった。

翌二十一年二月、小学校が引揚者収容所となり、まったくの着の身、着のまま、リュックサック一つの荷物で両親と私、そして大勢の引揚者と共に入所した。

一週間程して、いよいよ出国する事となり太原の駅から貨物列車に乗り^(※①)タンクー塘沽の港駅へと向かった。その途中何人かのロシア兵に列車を止められた。

「開門!!開門!!」と大声で叫びながらドアを叩いた。皆で内側からドアをしっかりと閉めて息をひそめてジーッと固まっていた。ドアを開けられたらと思うととても恐ろしかった。しばらくしてロシア兵も諦めたのか静かになり列車が動き出した。そして無事塘沽に到着した。港には大きな船が停泊していた。皆で乗り込み、そして中国を出港した。船内でも悲しい事があった。病弱だった幼児が薬もなく、手当てを受ける事も出来ず亡くなった。その遺体は黙禱の後静かに海に流された。あぁ〜…。

出港して五日目の朝だったと思う。「内地が見えたぞ!」と誰かの叫び声がして甲板に上がった。遠くに島が見えた。無事日本へ帰ってこれた事、喜びあった。

佐世保浦頭に上陸した。そこで消毒の為と言われ^(※②) D D Tなるものを、頭の上から足元まで真白にかけられた。その後、少し歩いてからトラックに乗り、針尾の引揚者収容所(現ハウステンボス)到着。そこに宿泊しながら順次各々の帰る所へ送り出される事となった。

終戦からこれまで大変な体験をしたが、この日本の広島・長崎の原爆被災での現実を見聞して、あまりの惨状に驚きとても心痛んだ。

戦争がいかにおごいものであるか、二度とあってはならない。世界が平和であることを心から願っている。

佐世保市 鶴崎絹恵
八十六才

【注釈】 ※①…天津近郊の地名
※②…シラミ駆除のための殺虫剤